

藤永 保・森永 良子 編

『子育ての発達心理学』（実践・子育て講座 1）

内藤 俊史

本書は、「実践・子育て講座」というシリーズの第1巻として刊行された。このシリーズは、少子化、さらには、子どもをもつことの意味や価値を見出せないカップルの増加、児童虐待の増加など、現在における新たな子育ての状況に対応すべく企画された。第1巻は、「子育ての発達心理学」というタイトルのもとに、基本的な精神発達と、発達からの逸脱や障害が扱われている。2部から構成され、第1部は5つの章、すなわち、「第1章 人間発達の基本を考える」、「第2章 認知と言語の発達」、「第3章 社会性の発達」、「第4章 発達と問題行動」、「第5章 軽度発達障害」からなっている。前半の3つの章は、藤永保氏により、基本的な精神発達について著者による研究を含めた解説がなされ、後半の2つの章は、森永良子氏により、問題行動についての解説がなされている。第2部はQ and Aという形式で、編者を含めて14名の著者により、19の質問に対する回答という形で、それぞれのテーマについての解説がなされている。本書全体の1/4弱(62頁)が第2部に割かれている。この点は後に述べるように、今日における子育ての具体的な問題に対応しようとする著者の姿勢が現れていると言えよう。

本書の特徴は、著書のタイトルからもみてとることができる。「子育ての発達心理学」というタイトルには、子育てという具体的な実践と発達心理学という学問とを結びつけようとする意図があらわれているようにみえる。もちろん、発達心理学が子育てと無縁ということはあまり考えられないことである。したがって、「子育ての発達心理学」という言葉は、一見不思議な言葉のようにもみえる。しかし、子育てについて、その悩みが述べられる場合、適応上の問題があげられることが多く、それらの悩みに対しては、専ら児童臨床心理学者が答えるという傾向がこれまでであったのではないだろうか。

かつて、「心理学者の誤謬」という言葉を唱えたアメリカの発達心理学者がいた。その意味は、心理学者は心理学のなかで問題となっているテーマが、子どもの教育や広く社会にとって重要な問題であると錯覚してしまうことを意味している。本書は、その点で、子育てという重要なテーマのもとに、発達心理学と児童臨床心理学を結びつけている。

第1部の前半は、子育てに関する子どもの発達についての理論的な解説となっていて、遺伝と環境、初期経験などの子育てにまつわる発達の背景が解説されている。そのなかで、著者自身による研究

も含めて最近の研究動向や現在の社会的状況をふまえた解説がなされている。たとえば、最近問題となっている児童虐待と関連させて、著者の研究の一つであり既によく知られている育児放棄の事例が述べられているが、子どもの発達の可塑性または非可塑性について多くの示唆を与えている。また、社会性についての章では、子どもは、社会的な世界を血縁を中心とした一次集団から二次集団へ拡大していくが、最近話題となった「公園デビュー」が、今では二次集団への参加の機会となっていることが指摘されている。このように、現在の社会の変化に言及しつつ、子どもの発達の普遍性と変化が、説得力のある根拠とともに論じられている。

第1部の後半は、子育ての過程で生じる問題行動について解説されている。ここで、「問題」と書いたが、これには、いくつかの意味が含まれている。まず、子育てや教育に携わる人々が感じる「問題」「悩み」がある。「ことばが遅れているように見える」といった身近な子どもの場合もあれば、社会的な「問題」も生じている。たとえば、教育の世界では、「いじめ」「不登校」などが社会的な問題になっている。この種の「問題」は、子どもの成長への期待とかなり対応するはずであり、それらの時代的、文化的な相違も考えられる。しかし、それがそのまま、何らかの対処を必要とするものであるとは限らない。

著者は、「問題行動」という概念を、「問題とされる行動」と「問題性のある行動」に分けることから始めている。前者は、親やその他の保育者などによって「問題」と感じられる行動であり、後者は、専門家の診断を必要とする行動とされる。その上で、著者は、さらにそれらの行動がどのような場合に「異常行動」と判断されるかを説明するとともに、さまざまなタイプの問題行動を事例をあげつつ解説している。

筆者が指摘しているように、特定の行動をもって「異常行動」と判断することは難しい。たとえば、指しゃぶりは初期の多くの子どもにみられる発達上の行動であるのに対して、ある時期を経た後の指しゃぶりは、その原因によっては何らかの対応が必要となる。さらに、現在では、健常と異常とを明確に分けることが難しいということが、再三指摘されてきた。このような状況にあって、本書では、「問題とされる行動」「問題性のある行動」「適応」「異常行動」が整理されていて、その上で事例を含めて解説がなされているために、わかりやすい解説になっている。

第2部は、個別的なテーマについての解説である。たとえば、「いくら注意しても、片付けができず、忘れ物が多く、だらしなくて困っています。」「どこからがしつけでどこからが虐待ですか。また虐待の影響はどのくらい続きますか。」「早期教育には賛否両論があるようで迷ってしまいます。」「4歳になったのにまだ反抗期らしいものがみられませんが大丈夫でしょうか。」等々、子育てに携わる人々の多くが関心をもつと思われるテーマがあげられている。テーマによっては、かなり難題のように思われるが、各著者が解答の形で、それぞれのテーマを解説している。

これまで、本書が、現在の社会的状況あるいは子育ての状況をふまえた、意欲的な書であることを述べてきた。しかし、本書の特徴はそれだけではない。本書を読んで感じることは、それぞれの内容が説明されるとき視野の広さである。編者のお二人は、長年にわたって日本の発達心理学と

子どもの臨床心理学に貢献し続けてきた研究者であり、その著書である本書に対して、自ずから広い視野からの論述を期待する人も多いのではないかと思うが、本書は期待どおりの書物となっている。

視野の広さには、主に2つの面があるように思われる。一つは、時間的な展望あるいは歴史的な展望の広さである。また、もう一つは空間的、地理的な広がりである。第一の時間的な展望については、さらに3つの点でその広がりを考えることができる。第1は、子どもの発達を考えるときの観点である。子どもの発達を、それだけをみれば、生涯発達という観点をとったとしても人間の一生という限られた時間に過ぎない。しかし、著者は、子どもと養育者とのやりとり(子育て)で生じる問題を、世代から世代への移り変わりの接点で生じる問題としてとらえている。今、子育てや子どもの教育で悩む親たちも、これまで、子育てや教育による発達過程を受けてきたはずであり、いわば歴史を背負っている。子育てという行為は、時代の接点ともいえる活動なのである。

第2は、現在の子どもを囲む環境を、時代の流れとともに理解することである。これについては、特別に章が割かれているわけではないが、随所に、子どもを囲む環境の時代的変化が言及されている。家族形態の時代的変化、また、わかりやすい例としては、かつては栄養が大きな問題であったが、現代では肥満が健康上の問題となってきたことが指摘されている。

第3は、現在の発達心理学の立場が、心理学の歴史-社会的な経緯とともに説明されている点である。これについても、とりたてて「発達心理学の歴史」や「問題行動の心理学史」といった章がある訳ではないが、個々のテーマを述べていくなかで、その研究の歴史的な経緯が時として説明されている。「性格」と「人格」という語にまつわる歴史的経緯、「施設病」という言葉の歴史的な経緯などが説明されている。

このような歴史的推移についての説明は、単なる歴史的回顧にとどまるものではない。歴史的推移は、今を理解する一つの方法である。もともと発達という視点は、時間的、歴史的推移を欠かすことができない研究領域であり、その視点がそのまま発達心理学、問題行動の臨床心理学のあり方自体にも向けられている。翻って考えれば、現在の発達心理学における概念も、私たちの歴史的-社会的状況のなかで生じているのである。

もうひとつの広がり、地理的、空間的な広がりである。あるいは、子育てが行われるさまざまな文化をとらえる広い視野である。データベースの整備の状態にもよるとも考えられるが、心理学の研究は、その多くが欧米で行われていると言われる。自ずから、その理論のあり方や知見は欧米諸国に偏る傾向は避けられないだろう。したがって、理論や知見を日本の子どもたちに適用する際に、日本の社会的状況や子どもたちのあり方を考慮しなければならない。また、理論をより広く適用可能なものにするためにも、さまざまな文化への考慮が求められる。本書では、現代の日本の子どもや子どもを囲む環境を直視することによって、いわば文化についての配慮が自ずとなされている。また、明示的には、子育ての背景として影響をもつ「子宝思想」に関して、示唆に富む研究結果が紹介されている。詳細は述べられないが、クラスター分析の結果として、欧米の親に対して、

日本・韓国・中国が対比され、さらには、日本・韓国に対して中国が対比されるという結果は興味深い。子育ての背景となる考えは、子育てについての態度にも影響をもたらすはずであるし、そこで「問題」として意識されている事柄も自ずと異なってくるからである。

本書は、今の子どもたちに強く焦点を当てることによって、歴史、文化という視点から、子育てや発達研究の深さを教えてくれるように思う。そして、そのような観点から考えたとき、子どもを育てるといふ営みの歴史的、文化的意義が読者に感じられてくることだろう。

(大修館書店刊、2005年4月発行、B6版、261頁、本体価格2,200円)